



文部科学大臣補佐官

鈴木 寛

すずき・かん ●1964年生まれ。東京大学法学部卒業後、通商産業省入省。在任中から大学生などを集めた私塾「すずかんゼミ」を主宰。2014年東京大学教授、慶應義塾大学教授に同時就任。15年2月より文部科学大臣補佐官を務める。

喧嘩ができ仲直りもできる
真の友人をつくれる人材に

卒業後、生徒が生きていく社会は、よくも悪くも多様性に満ちています。

自動車や家電に代表される製造業の中には、従業員の過半数がノンジャパニーズという企業も珍しくありません。農業現場や建設現場も海外からの研修生に支えられています。日本人中心の職場など少数派に。その最たるものが、日本国籍もしくは日本語だけで仕事成り立つ議会や役所、マスメディア、そして学校です。

昨年、倉敷市で開催されたG7教育大臣会合でも認識が共有されましたが、幼児教育、初等中等教育、高等教育のすべてを同一国で受ける

人の割合が減っているとのこと。事実、東京大学大学院の約23%は外国人留学生であり、日本の企業が好んで採用するのも外国人留学生です。こうした多文化社会を生きるには、どのような資質が必要でしょうか。

文部科学副大臣時代、グローバル人材育成推進会議の幹事会座長として「グローバル人材」とは何かについて議論を重ねました。「多文化社会を生きる人材」と言い換えても同じですが、もちろん、英語を話せるだけの人材のことではありません。私は、「日本語以外の言語で喧嘩ができて、仲直りもできる。真の友人をつくれる人材」だと捉えています。

多文化社会においては、往々にして意見のぶつかり合いが生じます。バックグラウンドや価値観の差があまりに大きく、喧嘩に発展することもしばしば。それでも、一緒に生きていかなければいけない以上、「どうすればうまくやれるのか」と、前向きに捉えなくてはなりません。そこから本気の対話。矛盾や葛藤を乗り越えるからこそ真の理解につながります。

日本人はどちらかというと、それが苦手です。感情を抑え、我慢し

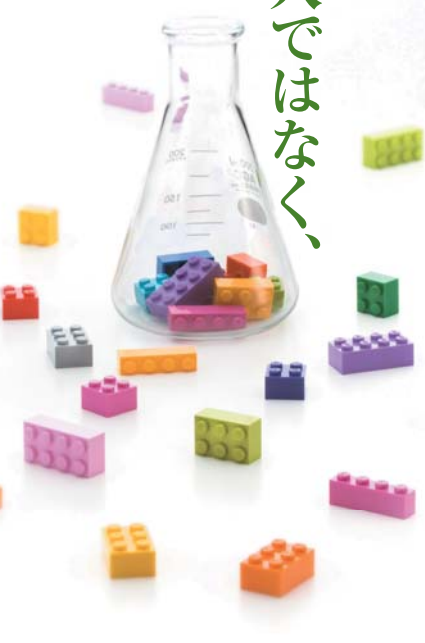
誰もが楽しく生きるために 教育がいま変わるとき

多様な価値観を認め合い、新たな価値を創造する若者を育てるために、教育現場でできることは何か。東京大学公共政策大学院および慶應義塾大学教授を兼任し、文部科学大臣補佐官としての重責を担う鈴木寛氏に、高校の先生方へ向けたメッセージをうかがいました。

取材文／堀水潤 撮影／平山論



作るべきは、知人ではなく、友人であり同志



てしまう。しかし、自分が感じていることを正しく主張しないと、多文化社会のなかで、真の友人をつくることはできません。今の若い人は、SNSを通じて知り合った知人は多いかもしれないけれど、本当に必要なのは友人や同志。そのためには、きちんと喧嘩して、仲直りをするこ

「熟議」を通して、自らの多様性に気づく

価値観や生き方の多様性が広がり、単純には答えが出ない問題ばかりの今、私は「熟議」こそ、日本社会や教育現場に必要だという信念をもっています。熟議とは、多様な当事者が参加し、偏った立場や意見を

超え、感じたことを率直に表明しながら対話を続けていくこと。対立が激しく、解がないと思われる問題に、現実的な改善の道を見出す手段でもあります。

その意義を5つに絞ることができ

ますが(図表)、特に強調したいのが3つ目です。多様な当事者と熟議を重ねると、自分の知らないさまざまな視点があることに気づかされるのですが、実は、自分自身の中にも、いろいろな立場や判断があることに

も、同時に気づかされるのです。かつての工業社会は、男性であれば会社員、女性は専業主婦というように一つのアイデンティティに押し込めてきたところがありました。そうした社会構造下では、対立が生じたとき対話が生まれませんでした。みな

ながみ、一つしかない自分の立場でポジショントークを繰り返すからです。しかし、人間には本来、さまざまなアイデンティティがあります。アイデンティティと複数形を使ってもいいくらい。この、自らの中に存在する複雑性・多様性を自覚することがとても重要です。それまで無意識のうち

に規定してきた自分の役割が、数あるアイデンティティの一つではないことに気づくと、対立者と思っ

ていた相手にも、同じような悩みや板挟みがあることに気づきます。5つのアイデンティティのうち3つは相容れないけれど、2つ似たところがあれば、そこを膨らますことで、解決への道筋が開けてくるのです。一例をあげます。一時、存続が危ぶまれた市民病院がありました。

今後の在り方を考えるため、経営者や医師、看護師、市職員、市民など多様な当事者が集まった熟議の場で、看護師を代表する労働組合の幹部からこんな発言が飛び出しました。「自分たちの給料を削り、浮いた財源で、不足している小児科の医師を雇おう」

簡単には合意形成できない 難題に立ち向かい、生きていく

この例は熟議によって合意形成がなされたケースですが、必ずしも合

図表 「熟議」の意義

- 第一に、情報洪水の中で思考停止している自分に気づく。
- 第二に、直面する問題に自分の知らないことがあることを人から学ぶ。
- 第三に、自らの中のいろいろな自分・立場・判断があることに気づく。
- 第四に、熟議の場を通じて真の友人と語る喜びを得る。
- 第五に、熟議によって合意形成がなされるのではなく何かが始まるきっかけとなる。

意形成することが熟議の目的ではありません。むしろ、世の中にある課題は簡単には合意形成できないものばかり。合意形成しやすい課題、あるいは、前例があるなど簡単に解決できる問題は、AI(人工知能)に任せればいい。では、人間の仕事は何か。それは、AIが「解なし」と結論を下した難題に立ち向かうことではないでしょうか。なぜなら、解がなくても、我々人間は生きていかなければならないから。人間の英知が問われるのは、こうした時です。

大切なのは、難題と向き合ったとき、あたふたするのではなく、当事者同士が立場を超えて議論を尽く

し、その問題の構造を少しでも理解しようと努力すること。今のリソースでは解けなくても、解決に向けてみなが頑張ることはできます。今日よりも明日、明日よりも明後日と、少しでも理解を深めていくことで、いつか解決につながることを信じて。

欧米に2周遅れの日本がもつ 宗教的・文化的寛容さ

かつての工業社会における価値は標準化でした。いかに完璧にコピーするかが問われたのです。一方、情報社会の価値は差異。他と違うものに価値があるわけです。この劇的な転換に伴って、産業構造や就業構造、働き方や学び方が急速に変化しているわけですが、まだ、そこに追いついていないと思えません。いまだに工業立国としての型や、そのベースにある農村共同体の流れから脱していないのが実情です。その点で、多様性について考えるとき、日本は欧米と比べて2周遅れているように思えます。

では、欧米はどうかというと、潘基文前国連事務総長や、オバマ前大統領の最後の演説でも強調されていたように、移民・難民問題に頭を抱

えています。なかでも、キリスト教文化圏に、いかにイスラム文化を受け入れるかという難題に直面しているわけです。2周遅れとは言いますが、ここに来て日本のもつ宗教的な寛容さと文化的対応力が有利に働くと感じています。よく言われるように日本には、多神教的な世界観があり、あらゆる存在を認める複数性尊重の風土があります。和漢混交、和魂洋才など、外部のものを日本的文脈の中で再編集することにも長けています。

かつ、おもてなしの文化があり、客人に対して温かい。私のゼミの学生も、地方の方たちに本当によくしてもらっています。異なるものになやかに受け入れる社会の懐の深さが世界的に試されている時ですが、私は、日本、特に地域社会にはその深さがあると信じています。

異なるものも受け入れる 懐の深い社会になるために

ただし、気になるのは、「そんな余裕があるなら生産性をあげろ」「そんな暇があったら勉強しなさい」というように、生産性や効率性の呪縛に囚われている人たちの存在です。

誰もが複数の アイデンティティをもっている

なかでも由々しき問題は、おじいちゃん、おばあちゃんのお見舞いやお葬式よりも、塾を優先させる保護者がいること。英単語の20や30を覚えることよりも大切なことはいくらでもあります。最期の数カ月を二縮に過ごすことで、生と死について全身全霊で考える。その経験によって志が生まれ、素晴らしい医療関係者になるかもしれないのです。

保護者が少し近視眼的になり、教育現場にも強い影響を及ぼしている状況は改善されるべきです。一方で、かつてのような共同体が崩れ、保護者、特に母親が孤立している状況も考慮しないとけません。子育てについての確に助言できる身寄りが少ないため、ますますセンチティブになっていく。そうした悪循環も同時に改善しなくてはなりません。このように、社会にはさまざまな課題、難題があります。それをみなで協力することで少しずつ是正していく。オーストリア出身の社会思

想家イリイチが提唱したコンビビリティ(conviviality)という概念があります。簡単に言うと、みながワイワイ楽しく、生き生きとしている様子。それが私の理想です。それこそ、ロボットやAIの力も借りながら、障がいのある人や言語の壁なども取り払い、多様な人々が、個性を活かし、生き生きと生活できる社会です。

